二年生

ハンドボールと私

西屋 千洋

一年生の終りも近い二月の初旬だった。その頃の私は、バカ程気負い込んでバレーボールをしていた。とにかくバレーボール部であった。健康手帖のクラス名の欄が一年・二年・三年と別々にされているのを見て〝こんなもん一つで結構や〟と三つも別々な事を書くなんてことは絶体に信じられなかったし、自分はどの欄にも〝女子バレーボールクラス〟とズラリと並ぶことを、ある満足を持って確信していた。そんなあるほど、友人の絶大なる歓めによって〝他のスポーツを見るのも、又楽し〟と言うような気分で友人と訪独日本選抜チームと大阪地区選抜チームとの試合を見に行った。元来、熱しやすい性質なのかも知れないけれども、80近くも熱を上げてしまった。何でも見たら素晴らしいと思うのだから、毎度のことであっただろうに!!!。それから二週間程後に校内ハンドボール大会があって、選ばれた皆、とても親しくしていた子ばかりだったから、ワァ〜〜言って走りまわった。ところが又、その時の成績が三対三で引き分け! 七米スロー三本づつが又、三対三で引き分け、続いて一本づつの七米スローでとう〜〜一対〇で敗けてしまった。このスローは入ったのだが、ポイントオーバー等というものを取られてしまったのだ。その悔やしさ?とスピード感への憧れとで、今まで何にも知らなかったハンドが、何か大きく心の中にマークされて来た。スピード感、行動範囲の大きさに魅せられて、スポーツはバレーボール以外に考えられなかった私が、ハンドをレたい等と考え出してしまった。

中学からずっとしてきたバレーボールだった。今も続いている中学時代の友との友情は、言わばバレーボールで結ばれた友情であった。三人共、各々選った学校だったけれども中レ合わせたようにバレーボールクラブに入部した。そして、お互いに語り合と希望を持っていました。それに、私は末熱だったけれども〝PL〟というポジションをもらっていた。それで二月と言えば、そろそろ一年生に主体が置かれかけていた。

そんな時に〝バレーボールをやめる〟と宣言したのだ、しかもただやめるのではなく〝ハンドへスリたい〟とまで……。今から思えば、よくあんな事を言ったものだと思う。どうかしていたのだと思う。余りに自分勝手すぎて、自分ながら、自分のした事と思え

ないくらいなのだ。当然のことだが、一年生はもとより二年生の人には特に非難された。丁度、テスト中であったにもかかわらず部会が開かれ、先輩、コーチ、にもいろいろ当然の非難を受けた。部員の誰もが、一年生に主体が移っていっている時で、ポジションをもらっていて、しかも、その後にスタメンべき人が一人もいないということがわかっているのに、"ハンドをしたいから"等ぬいう理由でやめるなんて、そんな馬鹿気た事は考えられることと思っていなかったと思う。だから、私が、テスト最後の日の部会に、先輩にもコーチにももう一度悟されたのにやっぱり、やめたいと思いますと言った時には、皆あきれただろうし、多分先輩も"ごんな子ならもういらん"と思われただろうと思う。友人達は、"バレーよりもずっと上手になれるのですか！ ポジションを捨ててまで、ハンドをやりたいのですか"と言ってきた。あの時は、それ程までに、どうしてそれ程までに強い気持になれたのだろうか！、神経がどこか狂っていたのだと思う。とにかく、それから今まで、バレーの人達には、すまなさとある気まずさを持ったままハンドボールをしてきた。又、二年生から始めたということで、いろいろ悪い気持をさせられたことも多かった。

あんなにまで騒ぎを起してやって来たハンドボールを、もうある事情で今までどおりしていけない時を目の前にして、今までやって来た事が信じ難い。一体、バレーをやめてから、今まで何をやって来たのかと思うと、残念な事に、情けないけれども、私は黙らざるを得ない。ほんとに短かいこの期間の意義を一生懸命考えて来る。バレーより、上手になれたろうか！ でも一つはっきりと言おう。胸を張って言おう。ハンドボールをしている時は、すごく楽しかった。そして、実際、その点については私は決してあやんでいけないことを……。

感じたまゝ

門田真弓

ハンドボールというものについて特に難しいとか、むづかしいとかいう事は全然思わないで入った。たゞスピードと広いコートの中で思う存分出来るという事にあこがれて。しかしやってみて知ったのは、私達が考えていたような生やさしいものではないということです。本当にやりがいがあって、入部した事を喜んでいます。まだ全然といっていい程何も満足に出来ないのであるが、毎日練習するだけで楽しい。☆